声 明

西田昌司参議院議員の“ひめゆりの塔”歴史書き換え発言及び 沖縄県内の新聞報道に対する批判に抗議する

2025年5月13日

沖縄県マスコミ労働組合協議会 議長 塚崎 昇平
日本マスコミ文化情報労組会議 議長 西村 誠
沖縄タイムス労働組合 執行委員長 石川 亮太
琉球新報労働組合 執行委員長 吉田 健一
日本新聞労働組合連合沖縄地連 委員長 吉田 健一
日本民間放送労働組合連合会沖縄地連 委員長 高里 翔

西田氏は、本年5月3日、那覇市内で開かれた憲法シンポジウムの講演会において、『ひめゆりの塔』の展示を取り上げ、自らの歴史観に基づき「ひどいですね、あの説明を見ていると。亡くなった方々は救われませんよ、本当に。だから、歴史を書き換えられるとこういうことになっちゃうわけですね。」などと、発言した。また、5月7日の会見では、発言を報じた沖縄タイムス、琉球新報の報道に対し、「勝手に切り取られた情報で記者の思い込みで記事が作られた。大変危うさを感じる」と、批判した。

講演会での発言については、9日会見を開き、「非常に不適切であった」と撤回した上で、沖縄県民とひめゆりの塔の関係者に対し謝罪したが、「歴史の書き換え」との発言は改めず、「TPOとして出すべきではなかった」などという言葉は、表面的という印象しか与えない。

また、「ひどい」と評した沖縄の平和教育についても、「誤っていない」と自身の認識は変えず、さらに「切り取られた情報で記事が作られた」とする報道批判についても、従来通りの主張を繰り返している。こうした西田氏の態度は、問題の本質から論点を逸らした「反省なき謝罪」と言わざるを得ず、ここに強く抗議する。

『ひめゆりの塔』は、沖縄戦で亡くなった沖縄師範学校女子部、沖縄県立第一高等女学校の生徒や教師のために建立されたもので、若くして命を失った学徒達を含め、犠牲となった12万人余の県民を悼むだけでなく沖縄戦の記憶と歴史に向き合い、平和の創造について今を生きる私たちに問いを与え続けている象徴的な存在でもある。

講演会での西田氏の発言は、『ひめゆりの塔』が表す沖縄戦の実相を著しく歪めただけでなく、戦火を生き延び平和の尊さを伝えようと、その過酷な実体験を後世に語り継いできた先人達の意志を踏みにじるもので、断じて容認できるものではない。

そもそも、ひめゆり平和祈念資料館は、ひめゆりの塔や同資料館の説明、展示に、西田氏が言う「日本軍によって学徒が死に、米軍によって解放された」などの文脈は過去も現在もないと明言している。9日の会見では、「県内に住む知人に現地に行ってもらった」として調査結果を述べているが、自身が見たという展示物がどこのものであったかは、依然として明確でないにも関わらず、改修の前後で展示物が変わった可能性があることを示唆し、事実関係を問うた記者に対し「私の責任じゃなくて、あなた方が調べたらいいいんじゃないですか。」と、責任転嫁とも言える詭弁を弄している。

今回の問題の発端は、講演会における西田氏本人の発言である。当の本人が、自らの発言の根拠となった事実を十分精査しないまま、撤回、謝罪の言葉を述べ、あまつさえその責任を報道する側に転嫁しようとするその姿勢に、反省の意を汲み取ることなどできない。

さらに西田氏は、「記者の思い込みで記事が作られた」「発言を切り取りされた」などの発言については撤回することなく、これまで通り報道を批判しているが、事実に基づき問題点を指摘することはジャーナリズムの重要な役割であり、発言の趣旨を損なうことなく要点を絞って報道することは、記者に求められる職務遂行能力であって、今回の報道はそれを正当に行使したものに過ぎず、「切り取り報道」との批判は全くもって的外れである。

特に、沖縄タイムス、琉球新報においては、日々の取材の中で悲惨な沖縄戦をくぐり抜け、“命”を繋いできた先人達に触れ、取材で見聞きした彼等、彼女等の体験談を広くの県民に伝えている。沖縄戦を巡っては、日本軍が住民にスパイの嫌疑をかけて拷問し、虐殺した事例や避難した壕の中で、米軍に見つかることを恐れた日本兵が泣き止まない乳幼児を殺害した事例、住民の食糧を強奪した事例などが証言として記録されている。

また、日本軍の作戦計画において住民保護の視点が著しく欠如していたことは、多くの研究者が指摘するところであり、結果として「軍隊は住民を守らない」という戦争体験者の認識につながっている。こうした戦争の傷跡が、今日まで色濃く残る沖縄の報道機関にとって、沖縄戦を伝え続けることは言うなれば使命であり、公職にある者の沖縄戦を巡る発言に違和感を抱けば、それを記事にすることは義務と言っても過言ではない。

西田氏の「思い込み」「切り取り」などとする批判は、矜持を持って報道を続ける沖縄の報道機関の存在意義を軽視したもので、到底看過することはできない。強く抗議する。

9日の会見で西田氏は、戦後、沖縄の教育について、「米国に都合が良い教育を受けて大人になっていく。ある種の反日教育をされる。歴史を取り戻すということを沖縄の方も日本人全体でも、やらなきゃいけない」などと、改めて自身の歴史観に基づく持論を展開し、3日の講演会で述べた「地上戦の解釈も含めて、かなりむちゃくちゃ」との沖縄の平和教育に関する発言については、撤回しなかった。

沖縄の平和教育は、“地獄”とも形容された沖縄戦の体験者の証言を、未来への教訓として積み上げてきたもので、それを「むちゃくちゃ」などと切り捨てる姿勢は、歴史的事実に対する敬意を著しく欠いていると言わざるを得ない。

西田氏の“ひめゆりの塔”歴史書き換え発言は、単なる『TPO の間違い』などではない。

現職の参院議員で、国政与党・自民党の要職にも就いている西田氏は、自身の歴史観に固執することなく、今一度、沖縄戦の記録、歴史的事実に真摯に向き合うべきである。

以上